book

待望の翻訳

王安憶の上海をみずみずしく蘇らせている

松村志乃

▼長恨歌
王安憶著
飯塚容訳
9・1刊 四六判六四六頁 本体三二〇〇円
アストラハウス

待望の翻訳が出た。『長恨歌』は、二〇世紀の激動の時代を上海に生きた女性の物語だ。作者王安憶（一九五四・）は、母が作家、父が演出家という上海の文芸一家に生まれた。十代半ばで文化大革命（一九六七・七七）が始まり、国家政策によって一時期農村で暮らした。文革後の七〇年代末より創作を始め、以後四〇年以上にわたり、個人の視点から中国の、とりわけ上海に生きる人びとを書いてきた。

『長恨歌』は王安憶の代表作だ。一九九五年に発表され、中国最大の文学賞「茅盾文学賞」を受賞、その後、共産党政権成立以前の古きよき時代の上海を懐かしむ「老上海」ブームを背景に、映画、ドラマ、演劇に改編され、広く読まれてきた。

かつて若い研究者だった評者もまた、いくどとなく『長恨歌』を読んできた。だが実のところ、読むたびに重複が多く曖昧な言語表現に悩まされた。だが、この文体は日本語との相性がよかったらしい。飯塚氏の日本語で紡ぎなおされた『長恨歌』は、王安憶の上海をみずみずしく蘇らせている。

物語はまず、都市上海の紹介に始まる。きらびやかな都市の路地裏（「弄堂」）と、そこに伝わる流言、そのようすをひそかに眺める鳩を存分に紹介し、ようやく主人公王琦瑶が登場する。しかし、「王琦瑶」は固有名詞ではない。王琦瑶という「上海のおじょうさん（上海小姐）」はどの弄堂にもひとりは座っているような女の子だという。王琦瑶はいわば「上海のおじょうさん」の総称なのだ。かくして物語は、王琦瑶の人生を通して、さまざまに移り変わる都市の姿を映し出してゆく。

舞台は戦後の賑わいに沸く一九四〇年代の上海。少女王琦瑶は、その楚々たる美しさでもって社交界に進出し、国民党の要人李主任の愛妾となる。だが共産党政権が誕生した時、李の姿はこの世になかった。

ここまで読めば、四〇年代に活躍した上海作家張愛玲（一九二〇・九五）を想起する読者も多いだろう。張愛玲は五〇年代以後中国を去り、アメリカに移住する。だがその文学は、八〇年代以後の中国でリバイバルし、おおいに流行した。王安憶は『長恨歌』によって、張愛玲文学の継承者とされたが、それは張愛玲文学の女性たちのその後の物語をみごとに表現した証でもあった。

王琦瑶は五〇年代以後、ひとりで上海の片隅に暮らしていた。人民服など見向きもせず、相変わらずチャイナ・ドレスを着て、資産家夫人らとお茶会を催したり、麻雀を打ったりして、小さな生活を楽しんだ。のちに資産家男性と道ならぬ恋に落ち、娘を出産、シングルマザーとなる。しかしこの後、物語は六〇年代後半に始まる文革をほとんど描かぬまま、一息に改革開放政策が成果をあげた八〇年代に突入する。

文革収束後の新しい時代を、若い世代は謳歌した。だがそれは王琦瑶の目には、気品に欠く、粗野な時代に映った。そんな折、「老上海」ブームが起こる。時の人となった王琦瑶は、「老上海」に憧れる若い世代を連れ合いに、残りの人生を過ごしたいと願う。だがその思いは、無残に裏切られてゆくのだった。

中華人民共和国の誕生や文化大革命の勃発は、たしかに既存の価値観を覆す、大きな歴史的事件だ。だがそのインパクトの大きさは、あたかも歴史が断絶したかのように――ときに大きな問題を棚上げしたまま――錯覚させる。『長恨歌』は大きな歴史を直接的には描かず、そこに生きた「上海のおじょうさん」だけに焦点を当てている。文革の描写がすっぽりと抜けているにもかかわらず、時代を生き抜いた王琦瑶のたおやかでしたたかな生命力が、歴史の連続性を思い起こさせるのだ。

セピア色の「老上海」から、共産党政権の成立、文化大革命、改革開放まで移り変わる上海の四〇年、そしてそこに生きたひとりの女性の人生。『長恨歌』はそのすべてを含みながら、近代化に邁進してきた都市の姿を、多面的に映し出した。なにより、結末で上海への懐古趣味を無残に打ち壊す、作者の鋭さがよい。急速に台頭する中国の政治や経済ばかりが注目され、そこに生きる人びとへの想像力が欠落しているいま、必要とされる小説ではないだろうか。

（中国語圏文学研究者）

2024/4/6

現代書館 〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3-2-5
電話 03(3221)1321 振替 00120-3-83725 http://www.gendaishokan.co.jp/